

最終更新日: 2006 年 12 月 10 日 (2006 年 12 月 1 日版への追加)

「C 言語による数値計算入門」(初版) 追加正誤表

	誤	正
p.84 の 1 行目	$x_{n-1} : x_n = f(x_{n-1}) : f(x_n) \implies x_n f(x_{n-1}) = x_{n-1} f(x_n)$	$(x_{n-1} - x_{n+1}) : (x_n - x_{n+1}) = f(x_{n-1}) : f(x_n)$
p.94 の脚注	固有値 λ_i が $ \lambda_i < 1$ を満たすことである	固有値 λ_i が $ \lambda_i < 1$ を満たすことである
p.95, (5.4) の後に追記	と見積もることができます。	と見積もることができます。ここで、 $\varepsilon < 1$ なので (5.4) は $\ M\ < 1$ のとき成立することに注意してください。
p.107, 下から 4 行目	$\det M_\omega = \det[(D + \omega L)^{-1}\{(1 - \omega)D - \omega D\}]$	$\det M_\omega = \det[(D + \omega L)^{-1}\{(1 - \omega)D - \omega U\}]$
p.128, 定理 6.6 の証明の冒頭から「対して」までを削除	任意の $x \in [a, b]$ に対して $x = x_k (0 \leq k \leq n)$ のときは	$x = x_k (0 \leq k \leq n)$ のときは
p.141, 第 7.3 節の最後に追記	この理由について考えてみましょう。	この理由について考えてみましょう。なお、特に $\int_0^1 \frac{4}{1+x^2} dx$ の精度が良い理由については演習問題 7.5, 7.6 を見て下さい。
p. 143, (7.12) の後	ただし, $M_3 = \ f^{(4)}\ _{C[0,1]}$ です。	ただし, $M_3 = \ f^{(4)}\ _{C[a,b]}$ です。
p. 153, 演習問題の追加を奨励		7.5 定積分 $\int_a^b f(x) dx$ に対するシンプソン公式の誤差は $ I - S_{2n} = \frac{h^4}{180} f^{(3)}(b) - f^{(3)}(a) + O(h^6)$ となることを示せ。 7.6 $\int_0^1 \frac{4}{1+x^2} dx$ に対するシンプソン公式の誤差は $O(h^6)$ となることを示せ。

	誤	正
p.164, 3 行目	$= hD_2 + \gamma_1 h^2 \left(D_1 f + \frac{h}{2!} D_1^2 f + \frac{h^2}{3!} D_1^3 f + O(h^4) \right) \frac{\partial}{\partial y} =$	$= hD_2 + \gamma_1 h^2 \left(D_1 f + \frac{h}{2!} D_1^2 f + \frac{h^2}{3!} D_1^3 f + O(h^3) \right) \frac{\partial}{\partial y} =$
p.164, 6 行目	$= f + \tilde{D}_2 f + \frac{1}{2!} \tilde{D}_2^2 f + \frac{1}{3!} \tilde{D}_2^3 f + O(h^4)$	$= f + \tilde{D}_2 f + \frac{1}{2!} \tilde{D}_2^2 f + \frac{1}{3!} \tilde{D}_2^3 f + O(h^4)$
p.164, 下から 5 行目	$= hD_3 + \{\gamma(k_2 - f) + \delta_2(k_3 - f)\} h \frac{\partial}{\partial y}$	$= hD_3 + \{\gamma_2(k_2 - f) + \delta_2(k_3 - f)\} h \frac{\partial}{\partial y}$
p.166, (8.26) の後	さて, (8.26) が f に関係なく成り立つための条件は, $\frac{D_1 f}{Df}, \frac{D_2 f}{Df}, \frac{D_3 f}{Df}$ がすべて定数となることです.	さて, (8.26) は $D_1 f, D_2 f, D_3 f, Df$ に関する同次方程式で, これらの係数が f に無関係であるための条件は, $\frac{D_1 f}{Df}, \frac{D_2 f}{Df}, \frac{D_3 f}{Df}, \frac{D_m^l f}{D^l f}$ ($l = 2, 3; m = 1, 2, 3$) がすべて定数となることです.
p. 170, 6 行目	それが, アダムス・ムルトン法(Adamus-Moulton) です.	それが, アダムス・ムルトン法(Adams -Moulton) です.
p.170, (8.34) の左辺と右辺の第4項の積分区間	$\int_{x_{i+1}}^{x_{i+1}}$	$\int_{x_i}^{x_{i+1}}$
p.174, 第2行	$\dots, z_n(x) = z^{(n-1)}(x)$	$\dots, z_n(x) = y^{(n-1)}(x)$
p.184, (9.5) の後に追記	となります. さらに, (9.5) の両辺に	となります. ただし, $x^{(0)}$ は $c_1 \neq 0$ となるように選びます. さらに, (9.5) の両辺に
p.184, (9.6) の後	となります. よって, $c_1 \neq 0$ ならば,	となります. よって, $c_1 \neq 0$ と $\lambda_1 \neq 0$ より,
p.184, (9.10) の前	さて, 固有ベクトル λ と	さて, 固有値 λ と
p. 185, 定理 9.2	ただし, $\text{cond}(U) = \ U\ \cdot \ U^{-1}\ $ である.	ただし, $\text{cond}(U) = \ U\ \cdot \ U^{-1}\ $ とし, ノルムは 1, 2 または ∞ -ノルムとする.
p.186, 定理 9.2 の証明	よって, $\frac{\ V\mathbf{y}\ }{\ \mathbf{y}\ } \leq \varepsilon \cdot \text{cond}(U)$ が成り立つので, $\ V\ = \max_{\mathbf{y} \neq 0} \frac{\ V\mathbf{y}\ }{\ \mathbf{y}\ } \leq \varepsilon \cdot \text{cond}(U)$ となります. ゆえに, V の形から $\min_{1 \leq i \leq n} \sigma - \lambda_i \leq \ V\ \leq \varepsilon \cdot \text{cond}(U)$ を得ます.	よって, $\frac{\ V\mathbf{y}\ }{\ \mathbf{y}\ } \leq \varepsilon \cdot \text{cond}(U)$ が成り立ちます. ここで, V の形から 1, 2 または ∞ -ノルムで $\ V\mathbf{y}\ _1 = \sum_{j=1}^n (\lambda_j - \sigma)y_j \geq \min_{1 \leq i \leq n} \lambda_i - \sigma \sum_{j=1}^n y_j = \min_{1 \leq i \leq n} \lambda_i - \sigma \ \mathbf{y}\ _1$ $\ V\mathbf{y}\ _2 = \sqrt{\sum_{j=1}^n (\lambda_j - \sigma)y_j ^2} \geq \sqrt{\left(\min_{1 \leq i \leq n} \lambda_i - \sigma \right)^2 \sum_{j=1}^n y_j ^2} = \min_{1 \leq i \leq n} \lambda_i - \sigma \ \mathbf{y}\ _2$ $\ V\mathbf{y}\ _\infty = \max_{1 \leq j \leq n} (\lambda_j - \sigma)y_j \geq \max_{1 \leq j \leq n} \left(\min_{1 \leq i \leq n} \lambda_i - \sigma \right) y_j = \min_{1 \leq i \leq n} \lambda_i - \sigma \ \mathbf{y}\ _\infty$ となるので, いずれの場合も $\min_{1 \leq i \leq n} \sigma - \lambda_i \leq \frac{\ V\mathbf{y}\ }{\ \mathbf{y}\ } \leq \varepsilon \cdot \text{cond}(U)$ を得ます.

	誤	正
p.186, 15 行目	それに対応する固有ベクトル $\mathbf{x}^{(k)}$ に対して (9.14) を計算すると $\ A\mathbf{x}^{(k)} - \lambda^{(k)}\mathbf{x}^{(k)}\ _2^2 = \ \mathbf{v} - \lambda^{(k)}\mathbf{x}^{(k)}\ _2^2 = \ \mathbf{v}\ _2^2 - 2(\mathbf{v}, \lambda^{(k)}\mathbf{x}^{(k)}) + \lambda^{(k)} ^2 \ \mathbf{x}\ _2^2$	それに対応する固有ベクトル $\mathbf{x}^{(k)} (\ \mathbf{x}^{(k)}\ _2 = 1)$ に対し, $\mathbf{v} = A\mathbf{x}^{(k)}$ とおき (9.14) を計算すると $\ A\mathbf{x}^{(k)} - \lambda^{(k)}\mathbf{x}^{(k)}\ _2^2 = \ \mathbf{v} - \lambda^{(k)}\mathbf{x}^{(k)}\ _2^2 = \ \mathbf{v}\ _2^2 - 2(\mathbf{v}, \lambda^{(k)}\mathbf{x}^{(k)}) + \lambda^{(k)} ^2 \ \mathbf{x}^{(k)}\ _2^2$
p.191, 5 行目	なので, (9.19) を満たす \mathbf{u} は (9.20) で与えられることが分かります.	なので, (9.20) で与えられる \mathbf{u} は (9.19) を満たすことが分かります.
p.191, 10 行目に追記	反対向きのいずれかであることを意味します.	反対向きのいずれかであることを意味します. つまり, \mathbf{u} は符号を除けば一意に定まります. なお, $\mathbf{x} - \mathbf{y} = 2(\mathbf{u}^t \mathbf{x})\mathbf{u}$ なので, $\mathbf{u}^t \mathbf{x} \neq 0$ となることに注意してください.
p.201 の最終行	例えば, A_k の	例えば, A の
p.205, 下から 4 行目	$k > j + 1$ のとき $a_{ik} = b_{kj} = 0$ です.	$k > j + 1$ のとき $a_{ik}b_{kj} = 0$ です.